

2020年
12月14日
月曜日

原田 哲史 教授（社会思想史）

本物のルター『聖書』が入りました

れて、ザクセン公国のヴァルトブルク城に幽閉されます。実は、ザクセン公が部下に命じて、自国領のヴィッテンベルク大学で教えていた彼をかくまったのです。

ルターはそこで『聖書』を庶民の言葉であるドイツ語に訳します。それまで『聖書』はラテン語で書かれていたもので、腐敗した聖職者たちが——普通の人が読めないことをいいことに——テキストに説明して、お金集めをしたりしていたのです。本当は『聖書』には、貧しい人で真心のある人こそ救われる（天国に行ける）と書かれているにもかかわらず。

ルターは、まず1522年に『新約聖書』だけを出版し、それをヴァージョンアップしていくとともに、『旧約聖書』の訳にも取り組み、1534年に『旧約・新約聖書』を出します。このたび収蔵されたのは1530年の『新約聖書』です。『新約』単独として改善された段階のもの

のです。ルターの肖像の作者でもある画家ルーカス・クラナハ（1472（1553年）による挿絵がそこに含まれていると考えられることも、研究者によって指摘されています。

その他、コレクションには、宗教改革三大文書のふたつ『教会のバビロン捕囚について』（1520年）と『キリスト者の自由についての論文』（1520年）とが含まれており、既所蔵の『キリスト教会の改善に関してドイツのキリスト教貴族に与える書』（1520年）と合わせて、三大文書の初版がすべてそろいました。これは日本の大学では関学だけだと思われます。さらに、教皇庁からの破門勧告書を拒否した際にルターが書いた『嫌悪すべき反キリスト教的勅書に抗して』（1520年）も入っています。これらは今年（2020年）まさに500周年なのです。

プロテスタントの関西学院が

130年余りの歴史のなかで初めてオリジナルのルター訳『聖書』を所蔵した画期的な出来事それ自体感動に値しますが、それらを単なるお蔵入りにせず、私たちが鑑賞する機会をもつて歴史・思想を実感していくことは、信者のみならず非信者にとっても貴重なアクティヴィティングとなるでしょう。また、ルターが真実と思ったことを学生と共有してともに抗議し・感動したときの書物を見て今日それにあたるのは何かあらためて考えてみることも、意味があると思います。



収蔵されたルター『聖書』（1530年）のタイトルページ

マルティン・ルター（1483（1546年）の訳した『新約聖書』の本物その他、彼のオリジナル本が合計5点「ルターと宗教改革コレクション」として、2019年度に關学図書館に入りました。

ルターが1517年に「95か条の論題」をヴィッテンベルク大学に張り出し、ローマ教皇の金権体制・腐敗墮落を、とくにドイツでの免罪符の販売を批判したことは有名ですが、そのあともルターの闘いは続きます。1520年に教皇庁から破門勧告書が届き、それを学生たちと一緒に怒り、破り捨てて燃やした、と言われています。ルターは、神聖ローマ帝国（ドイツ帝国）の国会——帝国に属する有力諸侯たちの集まり——に出頭させられ証人喚問されても考えを変えませんでした。当時ではもちろん死刑に値します。ところが、証人喚問のあとその会場を出たとき、盗賊のような人たちに誘拐さ